

東日本大震災に対する日本医科大の対応－武蔵小杉病院、多摩永山病院

(畝本恭子・二宮宣文ほか、日医大医会誌 2011; 7(S): 53-61)

2018年10月5日 災害医学抄読会<http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

DMAT とは Disaster Medical Assistance Team の略で「災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム」と定義されている。医師、看護師、業務調整員（医師・看護師以外の医療職及び事務職員）で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね 48 時間以内）に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チームのことである¹⁾。

この論文は、東日本大地震の時に設備や環境の異なる 2 病院における医療支援の概要と DMAT の活動や課題を記述したものである。以下にそれぞれの病院の活動と課題、展望のまとめを述べる。

武蔵小杉病院は、地域 DMAT としての訓練を行なっているものの人事異動が激しい傾向にあるうえに遠隔地派遣を前提として整備されているものではないため、DMAT の出動はなかった。また、この地域においては普段は救急隊によるピックアップ方式で事足りるためドクターカーやドクターヘリを所有しておらず、災害後の患者さんの受け入れをスムーズに行うことができなかった。したがって、今回のような災害支援の場合に、要請に即応するためには、ドクターカーの設備と運用に必要な人的資源の確保が今後の課題であると考ええる。

また、派遣診療では引き継ぎ時の情報伝達を十分すぎるほど行う必要があると考える。今回は初日に十分な情報を得たつもりであったが、当初はインターネットも使用できなかったため所々に不足があり困惑する場面があったようだ。記録方法の整備なども含め、こういった支援シミュレーションを普段から検討する必要があると考える。

多摩永山病院は、東京都多摩地区の救急の中核病院であり、地域の救急システムを維持しながら災害後 27 日間で医師 15 名、看護師 10 名、救命救急士 9 名の計 9 チーム 30 名を派遣した。DMAT 隊員やレスキュー隊が連携し、26 時間に及び計 13 回瓦礫の中に侵入しバイタルサインの確認、輸液、薬剤投与、保温などの医療行為を行ったり、クラッシュ症候群の傷病者を救出して搬送し緊急手術を施行するなどした。また、引き継ぎ時の情報伝達を十分に行うことを配慮したためスムーズに治療を進めることができたようだ。

論文を読む限り、多摩永山病院の対応は非常にスムーズであったと考える。そのために留意すべき点として、組織のチームワークやバランス、事前のオリエンテーション、しっかりとした活動記録や引き継ぎが非常に重要であると考ええる。

[参考文献]

1)DMAT とは -DMAT 事務局 www.dmat.jp/DMAT.html